



「校庭にビオトープ」の試み 自然と触れ合い学力も向上

財団法人 地球・人間環境フォーラム専務理事 **平野 喬**

東京では引つ込みがちだった女子高生が、祖母の住む岩手県の漁村で海にもぐり、ウニ獲りを経験してから見違えるように明るくなり、前向きに生きていく。目下、人気沸騰中のNHK朝のテレビ小説「あまちゃん」を見てみると、人間は自然の中で鍛えられ、たくましく育つていくという、人と自然の大切な関係を再確認させてくれます。

自然との触れ合いが、豊かな人生の栄養になることはだれしもが気づいているものの、それを教育の現場で実践することは容易なことではありません。偏差値を中心とする競争社会の中で、子どもたちが自然と接する機会はどんどん減り、受験競争は低年齢化するばかりです。

そんな社会のあり方に警鐘を鳴らし続けている教育実践家があります。独協医科大学名誉教授の永井伸一さん。大学教授から独協中学・高校の校長に転任し、同中学・高校を学業の面からも、教育環境の面からも劇的に変えた教育者であり、人間の脳や生物学、動物行動学の研究者でもあります。

永井先生が同中学・高校の校長に就任したのは今から13年前。着任して生徒たちに発した言葉は「勉強ばかりしているとバカになる。もっと自然と接しよう」だったという。同中・高校は都内の中心部にあり、緑の少ない学校だったため、先生はまず校庭のコンクリートをはがしてビオトープを作ろうと呼び掛けました。

ホタル舞うキャンパスに

ビオトープとは色々な生き物が息する水辺のような空間のことで、トンボなどの昆虫やカエルなども集まってきました。ビオトープ建設隊を募集したところ、生徒68人や教職員らが集まり、長さ12mの太陽光パネルの電気でも水を循環させる水路を完成させました。二年後には、放流したホタルが自生し、毎年、100匹ほどが羽化して光を放つようになり、今では近隣住民にも開放され、初夏の風物詩になっているそうです。

さて、肝心の勉強の方ですが、先生の開発した簡易栽培法で、生徒たちが取り組む屋上の緑化、部活の奨励、コミュニケーション力をつけるための「オアサス」運動（オハヨウ、アリガトウ、サヨナラ、スママセン）では、毎朝午前8時には校長が校門の前に立ち、「オハヨウ」と声をかけることなどを続け、同校

の生徒たちの偏差値は目に見えて上がったそうです。

永井先生は11年間の校長在任中、3千人の生徒とその両親に面談し、親子の交流の仕方、お母さんの子どもとの接し方などについてカウンセリングをしたそうです。その結果、中学生までに「吸収力の高い脳づくり」「遊び学習」「秩序形成」の三つを柱にして教育をすることが、その後の人間形成に欠かせないと主張されています。

子どもが自然の中で思う存分遊ぶこと、楽しい冒険をたくさん経験すること。そして、これが一番失われているのかもしれないませんが、母と子の絆、子どもが一番安らげる場所として「母の胸」があれば、子どもは安心して冒険に出ることができるといいます。

永井先生は、校長を辞めるに際し、同小中学校の校庭にあった50mものコンクリートの塀を撤去し、椎の木などの常緑広葉樹の生け垣に変えてしまったそうです。東京環境教育実践研究会の最高顧問を務める先生の取り組みは、私の財団の機関誌・グローバルネットに連載中です。ユニークな研究成果をまたご紹介したいと思います。

財団法人 地球・人間環境フォーラム

環境省所管の公益法人。地球環境問題の科学的調査研究を目的に1990年に設立。

国立環境研究所・地球環境研究センターの研究サポート、研究成果の普及・啓発などのほか、月刊機関誌「グローバルネット」を発行。



校庭の一角につくられたビオトープと、そこで生まれたホタル (永井伸一氏提供)